

海とさかな

自由研究・作品コンクール

JEEF × ニッスイ



インタビュー

JEEF
鴨川 光



お話を伺った方

日本水産株式会社
CSR 部広報課
遠藤 純子さん



<https://www.umitosakana.com/>

企業インタビュー

日本水産株式会社

未来を支える子どもたちの 発見や体験を応援したい

ニッスイの愛称で親しまれる水産・食品加工会社・日本水産株式会社は、海の環境保全や食品ロス削減を中心にさまざまなCSR活動に取り組まれています。

今回は、JEEFが昨年から体験学習の企画に関わり、2021年で第40回を迎える「海とさかな」自由研究・作品コンクール（主催：朝日新聞社、朝日学生新聞社協賛：日本水産株式会社）について、CSR部広報課の遠藤純子さんにお話を伺いました。

「海とさかな」自由研究・作品コンクールが始まった経緯を教えてください。

40年前、当社の広報室（お客様相談室）に、福島県の山の中にある小学校に通っている5年生の少女からお手紙が届いたそうです。そこには、『私の学校は山の中にあります。これから缶詰の勉強をすることになりました。けれども山の中で調べるにも何もなくて調べられませんのでお手紙を書きました。』という書き出しで、缶詰の種類がどのくらいあるのか、原料の魚はどんなところろで、どんな海で、どんな船が捕っているのですかといった質問が要領よくまとめられていました。

それを見た相談室の社員が関連する資料を送ると、夏休みが終わったところにビーズ細工で作られたカモメの親子と魚が送られてきて、『ビーズをお礼として入れます。ちよつと失敗したけどもらってください。』というお手紙がついていたそうです。

その少女の心配りに感動をした相談室の社員が調べた結果、小学校の水産業の授業に対して日本水産として何かお役立ちができるのではないかと、海とさかなとわたしたちに関する小冊子を作成して全国の小学校に送るようになりました。それをきっかけに朝日学生新聞社さんなどに動いていただきこのコンクールが生まれました。

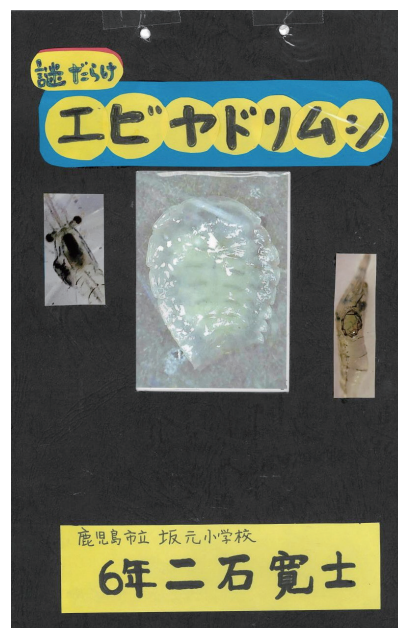
聞き手：鴨川 光（JEEF）

第39回
研究部門

農林水産大臣賞
「謎だらけエビヤドリムシ」
二石 寛士さん 当時6年生

第39回
研究部門

日本水産株式会社賞
「お魚さん、おいくつですか？」
林 凜太郎さん 当時6年生



—— たった一人の少女がきっかけだったということですが、現在のコンクールはどのような形になっているのでしょうか。

大きく分けると「研究部門」と「創作部門」に分かれます。さらに、研究部門の中に「観察図」と「自由研究」、創作部門の中に「絵本」、「工作」、「作文」、「絵画」という区分があつて、全部で6部門あります。人気があるのは、取り組みやすさもあつて絵画部門ですね。

—— 作品のクオリティが本当に高くて、細かいところまで観察していることに驚かされますし、部門がたくさんあるので作品の幅があつておもしろいですよね。遠藤さんの中で特に印象に残っている作品はありますか。

直近のものだと、昨年（第39回）の作品、いろいろ魚の耳石を調べた「お魚さん、おいくつですか？」という研究がありました。ひとつひ

とつの耳石を几帳面に絵を描いて、耳石の形や大きさをきちんと仮説を立てて調査していて、びっくりしましたね。

—— 以前、過去の作品を水族館スタッフの方にお見せしたら、研究対象がマニアックすぎると驚かれていました。そういったものも含めて、毎年3万件近い作品が届くのはすごいですよね。
応募促進のためにどのようなことをされているのでしょうか。

出張授業と体験学習を実施しています。昨年まではJAMSTEC（海洋研究開発機構）での体験学習や、日本水産学会などに講師を出していただき、全国の小学校に直接伺って出張授業を行っていました。昨年は対面での実施が難しかったので、JEEFさんに企画いただいたオンライン体験学習という形で海をテーマとしたワークショップを提供しました。

海とさかな
自由研究・体験学習

ニッスイ

「海」をテーマに
オンライン体験学習
ワークショップ開催

211人が参加 日本だけでなく海外からも

海やさかなをテーマに作品を募集している「海とさかな」自由研究・作品コンクール(朝日学生新聞社主催、日本水産協賛)。作品作りのヒントにしてほしいと先月、オンラインによる体験学習ワークショップが初めて開かれました。アート、サイエンス、ネイチャーの三つのワークショップには海外もふくめ、小学生211人が参加しました。

ワークショップの様子を、右下のQRコードからご覧いただけます。

作品の締め切りは10月5日(月)必着となります。専用のホームページから詳細をご確認ください。

海とさかな 検索

www.umitosakana.com

アートワークショップ

自分だけの海の色をつくったよ

アートワークショップの講師は、フランス・パリのループル美術館で研究員として働いている色彩アーティストの堀江ひとみさん。ループル美術館の前で「ポンジュール(くんにはは)」と登場し、美術館の壁・リリから「自分だけの海の色をつくろう」をテーマに授業を行いました。

まず、世界各地の美しい海や海中のサンゴなどの写真を観てもらう。海の色は青・緑・紺だけではなく、夕日に輝くオレンジなど多岐にわたることを学びます。そして、透明の容器に好きな絵具を溶かし、自分の思い描く海の色をつくりました。その色を使って、自分らしい海を両手に表現。堀江さんは、色を上手に操縦(コントロール)する「水泳艇」などで魚を表現し、気持ちをこめて書くことが大事と教えてくれました。

自分のイメージする海の色をつくりました。

サイエンスワークショップ

飲み水がとれるのは1万分の3だけ

地球に見えてもリングを覗いてみます

サイエンスワークショップを担当したのは、ジャパンRE&Sセンターの堀江光彦さんです。リングを地球に見立てて、「海とわたしたちのサステナビリティ(持続可能性)」について一緒に考えてみました。

授業では、堀江さんをお手本に、地球に見立てたリングを包丁で切ってみました。地球の表面積の4分の3は海で、4分の1が陸。その陸地の半分、つまり地球の8分の1しか人は住むことができない。なんと、切り分けた後に飲み水はほんのわずかです。

そして、地球の1万分の3の土地からしか飲み水がとれないこと、広い海の中でも魚がよく獲れるのは4千分の3の面積しかないことも知りました。わたしたちが生きていくには、海をはじめ、地球の環境を保全することの大切さを学びました。

好きな海の生き物を描きました。

ネイチャーワークショップ

神奈川・葉山の海の豊かさ実感

ネイチャーワークショップは、NPO法人オーシャンファミリーの海野長明さんが神奈川(葉山)の一角から案内しました。

最初に、相模湾の海の中を泳ぐベアやフナズメダイなど色とりどりの魚たちのようすを動画で紹介。魚についてさまざまなフナズメやフナにみられるクマゴは、磯に生息する海の生物の宝庫とも紹介されました。

Zoomのチャット機能も活用し、質問をリアルタイムで受け付けながら授業を進めました。さらに5〜6人のグループに分かれ、事前に作成された一歩目の目標を達成しながら、目の前に生きている海を学びます。海洋生物好きの子たちも多く、相模湾にすむ生き物の種類や生態の授業、人間にも伝わるさまざまな自然と専門的な質問も数多く、海野さんに寄せられました。

相模湾の海の中

一色海岸の海を学ぶ

——オンラインにしたメリットはどのようなものがありましたか？

対面イベントだと会場近郊の子ども以外は参加しづらいのですが、オンラインにすることによって離島や海外からも参加ができるようになりました。さらに、全世界の子どもたちが参加できるような、グローバルなコンクールにできたらと考えています。

——SDGsの4番に「質の高い教育をみんなに」と挙げられていますが、海外駐在の方のお子さんとか、病院にいるお子さんとか、「みんな」の枠から外されてしまっていることがあると思うんです。それがオンラインになったことで、いろいろなところに届けられる可能性が出てきました。

そうですね。これまで手が届かなかった子ども達にも参加してもらいたいです。

——今年で第40回を迎える「海とさかな」ですが、今後のビジョンを教えてください。

グローバルな展開はもちろん、協賛という立場ではありませんが、もともと日本水産の色を出していければと考えています。「海とさかな」が始まった当時から現在まで広報部門がこのコンクールを担当しています。ニッスイがCSRに取り組みを始め、JEEFに協力をいただくようになった昨年からは「サステナビリティ」の視点が加わりました。それまでも出張授業などで環境教育的なことはやっていたのですが、よりその要素が強まった印象です。SDGsがこれだけ身近になってきた中でポジティブな変化と捉えています。

——社会的にもSDGsや環境教育のニーズが強まっている中で、私達に期待されるのはどういったことでしょうか。

一民間企業の立場では、今の先生方や小学生が求めるものが全くわからないので、そういったところを教えていただけるのは有難いです。そして、やはり企業と子どもたちをつないでいただけたらいいですね。

——そこは私たちも担いたい部分ですし、子どもたちがなんとなくコンクールに参加するのではなく、自分からやりたくなるようなきっかけをつくりたいと思っています。

こうやって続けていったら、このコンクールから世界的な科学者が出るかもしれないですね。

——第40回ということは初年度に10歳だった子どもが50歳になっているわけですから、専門家になった人もいられるかもしれないですね。

研究部門には、毎年違う生きものを研究してエンタリーしてくれる子どももいます。来年も出すぞと、

第39回
創作部門

農林水産大臣賞

「ばあちゃんの網おこし」

山下 和香さん 当時6年生



長期的な計画で取り組んでいるのだと思います。そういう子たちに将来何になりたいですかと聞くと、JAMSTECに入りたいと言うんです。日本水産も候補に入れてほしいですけど（笑）。

——応募作品を見ると、コンクールによって突き動かされてどんどん海のことを調べて、さらに好きになる、将来もその業界に関わりたいと思うきっかけになっていると実感しています。ありがとうございました！

第38回
創作部門

日本水産株式会社賞

「海とさかな」

中田 小晴さん 当時6年生

